

救いと罪の定めの順序-2

左側の天国に行く道から説明していきます。私が先ほど三位の神について、ローマ書をもって説明しました。Iペトロ1:2も同じく、新約聖書がすべて同じです。では、ユダ書からもう一度例をあげてみます。ユダ1:1節、すべての使徒は三位の神の栄光のために、福音を宣べ伝えました。ユダ1:1を見ると「イエス・キリストのしもべ。」イエス・キリストが言及されています。「ヤコブの兄弟であるユダは召されたもの」（翻訳の順番が韓国の聖書と異なる）ユダは召され、聖霊による召し、聖霊によって聖くされる。その次「父なる神にあって愛され」父が言及されます。その後「イエス・キリストのために守られている」もう一度イエス・キリストが言及されます。守られている者とは聖徒のことです。聖徒一人が天国に行くまでのことです。24節「あなたがたを、つまずかないように守ることができ、傷のない者として、大きな喜びとともに栄光の御前に立たせることができの方」天国に入る時までとなっています。

もう一度1:1節、天国に入っていくまで、父、子、聖霊が働くことです。ですから、ユダ1:1の始まりから何となっていますか。父、子、聖霊です。それでは、その最後25節は「私たちの救い主である唯一の神に」父のことです。「私たちの主イエス・キリストを通して」イエスです。結論は「栄光、尊厳、支配、権威が、永遠の先にも、今も、また世々限りなくありますように。アーメン。」父と子との関係を賛美しながら終えます。すべての使徒たちがこのパターンです。皆さん、この書簡、手紙を見ると、どこも変わらない構造に驚くはずです。これから皆さんには、聖書が新たに見え始めるでしょう。

特にクリスマスが近づいてきています。説教がマリアにあってはだめです。マリア、特にマタイ書にあるマリアと、ルカ書にあるマリアは、ヨセフもユダ族であり、マリアもユダ族であることを強調しています。ダビデの預言があるからです。ならば、ガラテヤ4:4節「定めの時が来たので、神はご自分の御子を遣わし。」このため、クリスマスはマリアではなく、イエスをこの地に遣わした神、そしてイエスが人間の姿をしてこの世に来て、まもなく世から見下され、祭司は知っているながらも訪ねず、ヘロデは殺そうとし、エジプトに逃れるしかなかったほど低くされ、卑しめられたイエス・キリストを強調すべきです。決して人間がほめたたえられてはいけません。その内容が説教されてもいけません。

皆さん。クリスマスが過ぎて、有名だと言える説教者の説教を聞いてみてください。大体がマリアの話か、羊飼いの話になるでしょう。三位なる神の栄光を追及していない教会と言えます。韓国も変わりがありません。このような状況なら、わざわざイエス・キリストを信じる理由を未信者が悟るでしょうか。寺に行くことと教会に行くことの違いがわかるでしょうか。わからないででしょう。今日私たちは、始まる時点から、三位なる神のことを、もう一度強調します。

では本格的に救いに至る過程を地図で探してみます。

① 選びです。特にエペソ 1:4 節です。ここでは誰に焦点を合わせているかを見てはいけません。この聖句はジョン・バニヤンが引用している聖句です。エペソ 1:4 節へ行く前に、申命記 29:29 節から先に見ていきます。ジョン・バニヤンの時代はこのような地図を作ってもすべて理解ができました。ですが今は、理解が難しいです。ジョン・バニヤン時代の聖徒たちの靈的水準と今の私たちの時代の靈的水準があまりにもかけ離れているからです。

申 29:29 節「隠されていることは」とても秘密めいていて難しい奥義です。その隣に選びという単語を書いておいてください。選びとは神にのみ属していると言えます。何かというと、選びが実際に移行する前までは、誰が選ばれた者か分からないです。選びは神にのみ属する部分であり、奥深くて言葉にしにくい性質だからです。しかしローマ 9 章を見てみると、陶器師がその器を作る権利がないだろうかとあります。選び教理は父に属することです。創造主、神に属する権限です。私たちは被造物ですから、この選び教理は、創造主と被造物を区別させる教理です。ローマ 9 章を見ると、誰かは選ばれたから救われており、誰かは選ばれていないから救わないとすれば、選ばれている者は救われ、選ばれていない者はいくら教会に通っても救われないとしよう。このような間違った思想が長老派やメソジスト派に多くあります。申命記 29:29 を分からないからです。

ただ神に属されている問題なので、三位なる神が実行したときに現れるので分かることです。使徒パウロはガラテヤ 1:15 で「母の胎内にある時から私を選ばれた。」と述べています。しかし自分自身はイエス・キリストをいつ信じたでしょう。35~40 才の間にイエスを信じたと推定されます。では本人が選択された者と分かっていたのなら、ステパノ執事に石を投げつけて殺すとき、その邪悪な事をやめたはずです。彼は分かっていませんでした。やはり三位なる神が御業を起こした時にこそ分かることです。申命記 29:29 節は覚えやすく、重要な御言葉なので覚えておきましょう。

「29隠されていることは、私たちの神、主のものである。しかし、現されたことは、永遠に、私たちと私たちの子孫のものであり、私たちがこのみおしえのすべての言葉を行うためである。」

次に、主に属している働きです。「しかし、現されたことは」とあります。これは予定と選びが現れる時、I ペテロ 1:2 が語っているように、聖靈がキリストの血潮をその者に注がなければなりません。聖靈が血潮をまかれる時、選ばれたことが起こります。ですからもう一度、申 29:29 を見てください。「現されたことは永遠に私たちと私たちの子孫のものであり。」この永遠という単語も非常に重要です。ああ、私に選ばれたこの恵みがあるのだ~天国に行くまで私を守り、保護なさることを分かります。ユダ 1:1 節と 25 節、始まりと最後がこのような御言葉となっています。これは現れたときに分かることです。では現れれば、使徒の働き 13 章を見ます。この教理は大変難しく誤解してしまうので、乱用し、選び教理を反対します。メソジスト、きよめ派は選び教理を反対します。それなら、選び教理が聖書に出なければ良いではないですか。

しかし、選び教理は聖書に全部記録されてあるのです。なら反対してはいけないではありませんか。一方では反対して、一方では、長老派、メソジスト派は選び教理を悪用します。聖靈の業が現れていないのに「私たちは選ばれた、救われている民だ。」と錯覚し、聖徒としては生きていかないので。これが極端な異端です。教会の中にいつも存在します。

使徒 13:48 節を見ます。使徒パウロがピシテヤのアンテオケで福音を伝えました。福音を伝える中で聖靈様が働きました。48 節「異邦人たちがこれを聞いて喜び、主の御言葉を賛美した。」ここでの核心ポイントは、使徒パウロの説教をほめたたえるのではなく、神の御言葉 자체を賛美しています。なぜでしょうか。その人に聖靈の業によって、真の信仰が発生できたからです。聖靈様が働くと、靈的証明が当てられ神の御言葉が見え始めます。説教が聞こえ始め、悟れるようになります。それから神の御言葉を賛美するようになります。「永遠のいのちに定められていた人たちは、みな、信仰に入った。」（この箇所に線を引いてください。）ここに選び教理、予定教理が出ます。いつ知るでしょうか。効果が現れた時、聖靈様が働いて、靈的覺醒が起きて、信仰が発生され、その信仰の証拠は従順です。信仰の従順は神の御言葉をほめたたえます。これが現れていることです。

その現れがある時、パウロは選ばれた民だ～パウロが福音を伝えるからと言って、聞く人がみながみな信じたのでしょうか。そうではありません。あるときは足についた塵をはたいて去ります。人たちがあまりにも頑なで御言葉を拒否します。そういう人たちは地図、右側にいる地獄へ行く人たちの特徴です。イエスを信じるものを迫害し殺します。そういう場合は、パウロは足についた塵をはたいて去りました。しかし一方で信じる者たちがいれば、選ばれた民として彼らには全身全靈で働きます。どれほどその者たちを愛したかというと、使徒 14:19 を見ます。

「19 アンテオケとイコニオムからユダヤ人たちが来て、群衆を抱き込み、パウロを石打ちにし、死んだものと思って、町の外に引きずり出した。」

パウロは死ぬほど石で打たれました。町の外に捨てられます。ここは死体を投げる場所です。昔はこのように死体をそのまま捨てました。東京の外にあった時代がありました。20 節を見ると弟子たちが囲んでいます。ところがパウロは立ち上がります。奇跡の中の奇跡です。皆さん、石に打たれ、死体と思われて町の外に捨てられてしまったのに、どのようにして起き上がることができたでしょうか。顔は血だらけになり、身体は痣だらけ、普通の人間はこの状態で立ち上がれないでしょう。もがくので精一杯です。立ち上がっています。それは危険なことだからその場から逃げるべきではないですか。あ、この者がまた生き返ってきた、また石を投げよう～危険ではないですか。なのに町に戻ります。なぜこのような危険なことまでするのでしょうか。今信じたばかりの異邦人初信者たちがそこにいるからです。「皆さん、わたしは死んでいません。イエス様の力で起き上がったのです。」そして何を言うでしょうか。「私たちの主は復活の主です。皆さん、苦しくてもイエス様は最後までつかんでください。」

と、慰めるために町に戻りました。今信じたばかりの初心者のために、命を投げているのです。なぜですか。彼らには、選ばれた民の恵みがすでに現れていることを確認したからです。三位なる神が彼らを召したことを分かったからです。どれほど恐ろしい事件から、実は、その場面にいた人々は、それを見ると、イエス・キリストを信じれば自分もパウロのような羽目に会うのでは、みんなが放棄するしかない状況です。しかし戻って行きます。なぜでしょうか。御父の選んだ民だという確信があったからです。

選び教理は現れた時に分かれます。だとすればエペソ 1:4 節に行きます。今予定、選び教理を学んでいます。皆さん、この教理を一つ悟っただけでもこのセミナーに参加した、元がとれます。本来私はアメリカで働きをしました。アメリカで移民教会の牧師をしました。アメリカの神学校でも教えました。韓国に帰国して神学校の教授として働きをしましたが、牧師先生方がこの予定教理、選び教理を知らないでいました。予定と選びの目的を分かっていないのです。エペソ 1:4 節「すなわち神は、私たちを世界の基が置かれる前から」父の選択です。それが「キリストにあって選び」選ばれた民は、必ずキリストを信じるようになっています。ですから「キリストにあって私たちを選び。」となっています。この世界の基が置かれる前からという単語が、選んだ民を救うために、贖いの方式を創造の前にすでに定めて置いたということです。どなたがですか。父と子が。ならば聖霊様は何をしますか。それに対する証人です。父と子が定めて置いたことの証人が聖霊様です。創造の前にです。宇宙万物を造る前にです。人間を造る前にです。

ここで悟れるのは、アダムとエバを造りました。無知な人間です。しかし創造の前にこの計画があったため、アダムとエバは墮落の可能性があったため、神は分かっていました。なぜですか。人間たちに自由意思を与えたからです。万が一自由意思を与えないければ私たち人間は、人形劇の人形に過ぎないです。神がコントロールする人間、人形に過ぎません。神はそのような神ではありません。皆さんはうどんを食べることも、そばを食べることも、なべ焼きを食べることもできるように、自分の意志で好きなように食べることができます。。必ず、そばを食べれば救われますか。違います。神様が私たちに恵みの中で自由意思を与えました。その自由意志を与えたから、人間が墮落する可能性があったのです。すでに神がご存じであります。創造の前から選んだのです。それが、エペソ 1:4 節に神の計画はすでに定まっています。

アダムが墮落しました。墮落してすぐに、アダムとエバが死にましたか。「善悪の知識の実を食べると必ず死ぬ。」と言われたのに、死にましたか。死ななかったのです。むしろイエスを約束してあげます。創世記 3:15 節に女の子孫を約束してあげます。なぜですか。創造の前からこの計画があったからです。そうでなければ、神は失敗する神になってしまいます。なぜ神が造ったのに人間が失敗したのか。それは、神様が間違って造ったからだ。神様がミスしたからだ。違います。神は決して失敗していません。もうすでに準備して置いたからです。ですからエペソ 1:4 節を見ると「創造の前からキリストにあって選び。」結局信じるようになる者は、聖霊の御業によって信

じるようになります。しかし目的があります。「御前に聖く、傷のない者にしようとされました。」この選びの目的は大変重要です。目的は何ですか。「聖化」です。そうするとある人は、私は選ばれました。しかしその人に聖化が現れない、求めません。それは神が選んだ目的と一致しません。合わないです。その人は自ら選ばれたと主張しますが、選ばれた者ではありません。これが靈的分別です。私たちは牧師として、この聖化という目的が現れるようにすべきです。

それではパウロはこの事をここでだけ言っていますか。エペソ1章をもう一度見ましょう。エペソ1:7節「この方にあって私たちは、その血による贖い、罪の赦しを受けています。これは神の豊かな恵みによることです。」選ばれた民は、結局キリストの血潮の恵みを受けなければなりません。また、選ばれた民は13節「この方キリストにあって、あなたがたもまた、真理のことば、あなたがたの救いの福音（救いの福音に線を引いてください）を聞き、またそれを信じたことにより」この信仰はどうやって出てきたのですか。聖靈によって。それでもう一度「約束の聖靈をもって証印を押されました。」

ここで聖靈様は二つの働きをします。信仰を起こすこと、証印を押されること。皆さん、ここにハンコが押されています。神の所有とされています。再び17節「私たちの主イエス・キリストの神、すなわち栄光の父が」父と子が同時に言及されます。その次「知恵と啓示の御靈をあなたがたに与えてくださいますように。」どなたですか。聖靈様です。三位なる神様が全部登場します。父、子、聖靈。啓示の御靈とは靈的理解力。靈的に知る知識を聖靈様が与えます。それで結局、イエス・キリストを信じて、父が選んだ者であることが現れます。私が初めから強調した三位一体教理がまた出ます。

今ここに①選択教理が出るとき、人間の理性では分かりません。理性で判断できる、理解できる世界じゃないので、誤用し乱用することが長老派から出ます。選ばれたと言いながら何もしない者はエペソ1:4節からして、間違っています。はじめから選び教理を反対するメソジスト、きよめ派もだめだということです。さあ、私たちは長老派でもなく、メソジスト派でもなく、ただ**神のみことば**です。選び教理をかなり詳しく説明しています。

この教理についてもう一度ローマ9章を見ていきます。まずは8章から順に見てみましょう。選び教理は大変難しく、誤解しやすい教理なので、できるだけ詳しく説明しています。前回来た時は、救いの黄金の鎖について伝えました。ロマ8:29「神はあらかじめ知っておられる人々を。」誰のことですか。選ばれた者たちです。目的がありますね。なぜ選んだかというと、御子の形と同じ姿に似させるためです。この箇所の隣に書いて置くようにしてください。エペソ4:23を引用聖句としてメモすると良いでしょう。御子の形と同じにすることは聖化を意味します。ではなぜ選んだのでしょうか。聖化のためです。では選ばれた民は、どんな過程を通して聖化まで行くのかを見てみましょう。

ロマ8:30節です。

- ① 神があらかじめ定めておられた人…elect (父の選び)
- ② 召命…calling (聖靈の働き)
(中間にイエス様の血潮…jesus blood があり、ロマ8にはこの順序になっています。)
- ③ 義と認め…justification
(②と③の間には聖靈の業によって信仰の発生が起こります。キリストを信じることで義と認められる)
- ④ 聖化…sanctification
召した目的と選ぶ目的がこの聖化にあるからです。30節にはないですが、
- ⑤ 牽引…effectual calling (神が選びの民を必ず救いへと導く召し)
なぜなら、選んだため続けて保護されるでしょう。ですから gold chain…黄金の鎖といって繋がっています。
- ⑥ 栄化…glorification
死を通してその靈魂は罪を犯さない状態になります。この働きがなぜ6番まであるでしょうか。

ロマ8:29 にあるように地図 ①選びのために、全部が繋がっています。
ですからこの選びの部分を地図 ①置いているのは、三位の神様がこの働きを実行するために、今も働いておられるのが理解できます。この選びによって救いを受けるようになるのは、ロマ9章に行ってまた説明します。25節「それはホセア書でも言っておられるとおりです。『わたしは、わが民でない者をわが民と呼び、愛されなかった者を愛する者と呼ぶ。』」これが選びの目的であり、選びの証拠です。先に使徒13章で、神の御言葉を賛美するとなっていました。今この者たちは「わが民」神の恵みを受ける民となるのです。神をほめたたえる者となるのです。それで私たちは25節を見ながら、あ、選ばれた民である。この時に分かります。ロマ9:27「たといイスラエルの子どもたちの数は海べの砂のようであっても、救われる者は、残された者である。」選ばれた者が多いということでしょうか。少ないということでしょうか。少ないということです。

しかし私たちは、その選ばれた民、一人が起こされることを見て、神に栄光を帰るために、石に打たれ死ぬような困難があったとしても、その何人かの魂を救うために、この地に救いの恵みとともに使命を受けて、私たちが福音を伝えるのです。

ここまで午前の時間は、三位なる神の贖い史による働きと、選び教理について、皆さんは聖書的原理、教理を完全に学びました。ここから逸れている教えはすべて誤りで偽りの教えです。ですから日本教会、また韓国教会にも間違った教えがとても広がっています。アメリカ教会も溢れています。東京プレイヤーセンターを通して約800名の方が会員となっているので、その方たちがこの真理を悟って、東京プレイヤーセンターへ来て祈り、日本教会がこの教えによって回復するように願い叫び、日本のリバイバルが東京プレイヤーセンター東京から始まって、大阪、名古屋、南には福岡、北は北海道まで、そして中部地方は仙台までこの福音に溢れますよう望みとします。